

VI 特別編

この特別編では、前出の5編に含まれない各地区の古老の話や言い伝えを中心に、また一度は触れたが語りきれない多くの物語などを集めてみました。更には地域の新たな息吹としての横浜FCニッパツシーガルズの活躍や、昨年春に結成された東戸塚商店会の若い経営者たちのエネルギッシュな活動スタイルをお伝えしたいと思います。

過去の100年の確かなあゆみを実感するとともに、新たな100年に繋がるこの地区の希望にあふれる姿をご覧ください。

1. 東福寺について（平戸町299）

開山は建長寺の養谷師となっているが創建年は不詳である。応永元年(1401)に中興開祖円覚寺102世住職大雅省音和尚が開山したとの説があり、現在はこれが有力とのこと。

臨済宗円覚寺派で山号は永谷山（当時は鎌倉郡永谷村の飛地であったことに由来）、寺号は東福寺。本尊は釈迦如来像（奈良時代の高僧行基作と伝えられている）。

東福寺は隣接する平戸白旗神社の別当寺として位置づけられており、白旗神社は東福寺の鎮守社として鶴岡八幡宮の僧坊・相承院住職の元智の時に勧請され、乾元元年(1302)に創建されたとのことである。

今も東福寺と白旗神社の境内は一本の道で繋がっている。

白旗神社が源頼朝を祀ってあるところから、頼朝の遺髪三筋がご神体として贈られ、現在は東福寺にその時の経緯を記した文書とともに管理されている。明和6年(1769)10月14日に鎌倉相承院の密信から東福寺の慶巖に送られた書状には「鎌倉郡永谷村東福禅寺の鎮守白旗大明神は乾元元年9月9日、鶴岡相承院先住元智の時に勧請した由、今般右大将御鬢髪三筋を送る」と書かれている。遺髪は金襴緞子の錦織の袋の中に入れられ、桐の箱の中に大切に納められていて直接見ることは出来ない。



頼朝の遺髪の送り状

この遺髪は永年にわたって東福寺の寺宝として奥深く大切に納められていたが、最近では白旗神社の例大祭の際に三年に一度だけ公開されるようになっていた。因みに例大祭は9月16日から18日の三日間。最終日の9月18日に遺髪が公開される。

慶安3年(1650)に境内に子母美薬師堂が建立され旧東海道品濃一里塚近くに安置されていた子母美薬師（行基作と伝わる）が遷座されたという。当時この薬師の前を馬上で通ると落馬するといつて馬を下りて通る習慣があったようで、人の往来が増えるにつれて旅人に迷惑をかけ、通行の安全に支障が出るということで東福寺に移されたそうである。現在、子母美薬師像は、脇侍の日光菩薩、月光菩薩（薬師三尊像）と守護の十二神将像とともに本堂に安置されている。



薬師三尊像と十二神将像

また、境内には無量光佛（阿弥陀如来の別称）碑がある。旧東海道の境木地藏堂の近くには権太坂などの難所で行き倒れた人や馬などの遺骸を投げ込ん

だ「投込塚」があったという。

昭和36年に多くの遺骨が発掘され、その量は^{かます}呎で14俵半にも上ったそうで、この遺骨がすべて無量光佛碑に埋葬されたとのことである。昔の権太坂の急坂が如何に厳しかったかが窺える。

参考文献 東福寺由緒説明板、横浜市寺社案内、鎌倉散歩の記録（鎌倉手帳）

2. ^{じきしょうじあと}植松寺跡について（環状2号線東戸塚陸橋下）

今は跡地の石碑とバス停の標識にその名を伝えるだけであるが、源頼朝の妻・尼將軍北条政子所縁の寺である。本尊は正観音二位尼將軍守り本尊。明治9年(1876)に廃寺となった後は本山の光安寺（天龍山・平戸町）に合併され、本尊も光安寺に遷座している。



植松寺跡碑

古書では創建は貞応年間(1222～1223)となっているが、建武2年(1335)に当時の寺の堂主である秀照が残している「遺所書の事」では「此正観音菩薩之来歴尼將軍守り本尊。鎌倉御座所焉其頃鎌倉軍乱処々蜂起而神社堂宇儘焼失」云々として当地の檀信徒から「畑壺畝貳歩、大門通横六尺長二十間」その他の寄進を受けてこの地に正観音守り本尊を安置したと述べられている。た

だ、この書からは植松寺が建武2年(1335)当時に既に建立されていたのか新たに建てたのかは読み取れない。因みに北条政子が亡くなったのは1225年、戦乱で神社堂宇が焼失した鎌倉で幕府が終わったのは1333年である。

廃寺直前の明治8(1875)年7月に境内地と建物の一部が平戸学校に利用された。明治5年(1872)の太政官布告に基づき明治6年(1873)に神奈川県小学規則が制定され、旧川上村管内に増威学校(秋葉村・後に平戸学校が分離独立)と柏岡学校(下柏尾村)が設立されている。発足当初の平戸学校は教員1名、生徒49名という記録が残っている。学区と思われる平戸村と品濃村のその頃の人口は800人前後である。



川上小学校北分校

平戸学校はその名称を明治10年(1877)に敬護学校、明治36年(1903)に尋常高等川上小学校北部分教場と変えながら昭和43年9月30日に廃止された。ここに松植寺跡は小学校としての使命を終えている。旧東海道の品濃坂からほど近く、平戸、品濃の両地域の中ほどに位置する場所が学校用地として相応しかったものと思われる。なお、北部分教場廃止の翌日、10月1日に川上小学校北分校が開校し昭和44年4月に川上小学校から分離独立して川上北

小学校となった。

松植寺は今でこそ環状2号線の陸橋下の狭いところに跡地の石碑が立っているだけであるが、品濃坂下から国道1号に向かう旧東海道の左側の小高いところに向かって幅六尺・長さ二十間の参道が設けられていたことになる。

環状2号線の計画が持ち上がり、植松寺の跡地も道路用地として買収対象になった際に地元関係者から植松寺の名前を残せないかという声上がり、種々交渉の結果石碑を立てることになったということである。

昭和61年に墓地が光安寺に移転され、平成2年に石碑が建立された。

参考文献 天龍山光安寺、戸塚区史、川上小学校100年史、はまれぼ

3. 市民の願いが結実、東戸塚駅の開発ストーリー

東戸塚は、今では“人々が住みたい街”として人気だが、かつては陸の孤島



と呼ばれていた時代もあった。変革を遂げたきっかけは、昭和55年の東戸塚駅の誕生である。地元の人々が明治時代から悲願してきた新駅誕生は、民間の力によって実現した。東戸塚駅誕生と、街づくりの歴史を振り返ってみよう。

昭和40年頃を再現したジオラマ

(1) 幻の「武蔵駅」

東戸塚の新駅構想は、明治時代からあった。明治20年(1887)、戸塚駅と保土ヶ谷駅ができると、「中間に新駅を」との住民運動が起こり、その後大正12年(1923)には、ついに駅の創設がまとまり、新駅の名称も「武蔵駅」と決定していた。しかし不運にも関東大震災が起こり、駅の誕生は無期延期となってしまったのだ。その後も、新駅誘致運動は何度も盛り上がったが、ようやくその兆しが見えてきたのは、昭和40年のことだった。

(関連：生活の移り変わり編)

(2) 地元住民の願いを背負った、リーダー福原政二郎

新駅誘致運動が盛り上がるも、課題は資金だった。新駅建設には地元負担金が必要であり、その資金が集まらずに悩んでいたところ、私財を投げ打って新

駅開発の旗を振るリーダーが現れた。それが新一開発興業の福原政二郎だった。

昭和40年、東戸塚駅設置促進委員会が設置され、1万5千人以上の署名を集め、市長、市議会議長に陳情が行われた。翌年、この運動のリーダーとなった福原氏は、積極的に運動を進め、その5年後には10万人以上の署名が集まり、ついに昭和52年、駅設置等の覚書が横浜市と交わされた。

懸案であった建設費用は、総工費30億円のうち、25億円を福原氏が代表を務める新一開発興業が負担することで、計画が進められていった。



(3) 東戸塚駅誘致の活動、光と陰

しかし誘致運動は、必ずしも順風だったわけではない。

「当時は、本当に大変だった」と当時のことを知る人は振り返る。

東戸塚地区連合町内会・社会福祉協議会は結成以前から、東戸塚駅誘致に関わる区画整理事業に取り組んでいたが、区画整理事業については、東戸塚駅誘致に必要と思う人とそうでない人との意見が分かれていたからである。

(4) 駅名の由来

東海道線、横須賀線の位置関係から当初の候補は「東横浜駅」が候補に挙げたが、当時桜木町駅のそばに貨物駅で東横浜駅が存在することが判り戸塚駅の東方向を考慮し仮称東戸塚駅を名乗ることとした。仮称東戸塚駅は正式決定の段階までそのまま引き継がれ、昭和42年2月には設置運動の主体も東戸塚駅設置期成同盟に改組され強力な推進の母体となった。



「民間力で生まれた街、東戸塚」



平成28年頃の東戸塚

(5) 東戸塚駅開業までのあゆみ

明治20年 7月 横浜～国府津間 戸塚駅開設当時は西口のみ

大正12年 「武蔵駅」設置決まる。関東大震災で実現せず。

- 昭和12年 4月 戸塚駅東口が開業
- 昭和14年 新駅設置再燃 地元で秋葉駅派と品濃駅派で対立
またもお流れ
- 昭和40年10月 東戸塚駅設置促進委員会結成
- 昭和40年12月 15,000余人署名添え横浜市長、市議会議長に陳情
- 昭和42年 7月 戸塚・保土ヶ谷駅の間地点に駅設置を国鉄総裁に陳情
- 昭和43年 2月 東戸塚開発地区連絡協議会を結成
- 昭和44年11月 東戸塚駅設置につき、横浜市長より促進の回答あり
- 昭和45年 8月 東戸塚駅設置の具体化を国鉄本社他へ陳情
- 昭和47年 4月 東戸塚駅（仮称）設置計画案を都市計画局へ提出
- 昭和47年 8月 前田町小糸工業に於いて駅設置を求める住民大会を開催
署名は10万5千人に。官民一体の運動を展開
- 昭和47年 8月 東戸塚駅設置促進運動住民大会主旨を市長に陳情
- 昭和47年 9月 新駅設置について県知事より国鉄総裁へ要望
- 昭和48年 8月 新駅設置についての要望書を市長より国鉄総裁へ提出
- 昭和48年12月 新駅設置促進要望書を同盟会長より国鉄総裁へ提出
- 昭和49年 7月 横浜新貨物線土地収用につき建設大臣の事業に認定される
- 昭和52年10月 新一開発興業社長と市長並びに同盟会長との間で請願駅の
為の駅設置費用、用地負担について協定書が締結され、これ
を地元が負担することとなる
- 昭和54年 2月 新駅設置起工式が挙行される
- 昭和55年 9月 東戸塚駅開業式典が挙行される
- 昭和55年10月 東戸塚駅に一番電車(久里浜行)が到着、感激の一瞬を迎えた

駅乗降客数：	昭和55年	18,000人	(10月開業時)
	昭和60年	55,000人	
	平成元年	75,000人	
乗車人員*：	平成3年	38,541人	1日平均
	平成12年	49,094人	同上
	平成29年	58,780人	同上

* 横浜市統計ポータルより

(6) 自然と文化が調和した街づくり

一 品濃中央特定街区(東戸塚駅東側地区)の経過 一

とくに東戸塚駅東側地区では、自然の地形を活かし、住まいの機能と環境が調和した都市計画が行われた。ニューシティ東戸塚に代表される高層住宅、そして百貨店、コミュニティ施設の融合により、人間のための都市づくりが行われた。

「東戸塚の都市計画を考える上で道の導線、とくに歩行者導線の整備は重要

なポイントだ。道が良くなければ住み良い街は絶対に出来ない」と福原氏はこだわったという。実際に歩いてみると、駅からの遊歩道や、高低差を上手に利用し施設をつなぐ歩行者の導線は、よく考えられていることがわかる。

民間活力から生まれた東戸塚。歴史を振り返れば、人と自然、文化が調和する街づくりは、先人たちの努力と知恵に支えられていることに改めて気づかされる。

(7) 東戸塚駅と新戸塚観音堂 (川上町 253-4)

前述のように東戸塚駅開業のリーダーであった福原政二郎氏は国と言わず地域と言わず人と言わず、困ったときに困ったことを助け導いてくれた神様にお礼をし、拝みたいとの思いから「新戸塚観音堂」を建立し、東戸塚地域の守り神として広く親しまれることを願い、地域の人々の心の拠りどころとして欲しいと念じていた。また、オーロラモールを通り環状2号線陸橋を渡った左側には新駅設置や開発の一大事業を成し遂げられたのもすべて観世音様ご加護に依るものと深く感謝報恩謝徳の念を以って本尊菩薩像を奉安し福寿観音堂を建立された。



新戸塚観音堂



福寿観音堂

4. 横浜 FC 東戸塚フットボールパーク

幼児から高齢者までがスポーツを楽しむ場所

緑豊かな丘陵地に「横浜 FC 東戸塚フットボールパーク」(戸塚区品濃町)があります。ここは以前、Jリーグの横浜フリューゲルス・横浜 F マリノス・横浜 FC がトレーニング場として使用していた歴史あるグラウンドです。

現在は、女子サッカーチーム「ニッパツ横浜 FC シーガールズ」の活動拠点です。

チームは2013年、神奈川県サッカーリーグから活動をスタートしました。そして、県リーグ、関東リーグ、チャレンジリーグ(J3に相当)と毎年ステップアップして、2016年から「なでしこリーグ2部」(J2に相当)に活動の舞台を移しています。目標は、女子サッカーのトップリーグ「なでしこ1部」(J1に相当)昇格です。

このグラウンドは、このほかにも多くのスポーツに利用されています。

- ① 「横浜 FC 東戸塚サッカースクール」には、4歳から12歳までの少年・少女350人がスクール生として通っています
- ② 中学生チーム「ジュニアユース戸塚」には、スクール生から選抜された選手がメンバーです。
- ③ 女子サッカーが生涯スポーツになることを目指す「横須賀シーガルズ」（シーガルズの姉妹チーム）には少女からママさんまで150人超が汗を流しています。
- ④ サッカー以外ではラクロスやラグビー、アメフトなどにも使用されています。
- ⑤ 近隣地域の各種大会も開催されています。戸塚区連合町内会は年数回、グラウンドゴルフの大会や研修会を行っています。また、幼稚園の運動会も楽しい行事の一つです。

なでしこリーグ戦は例年、3月から10月に行われます。ニッパツ横浜 FC シーガルズのホームゲームはニッパツ三ツ沢球技場、保土ヶ谷公園サッカー場、日産フィールド小机などで開催されます。是非、彼女たちのひた向きなプレーに熱い声援をお願いします。



勢ぞろいしたニッパツ横浜 FC シーガルズのメンバー



戸塚出身の
中居未来選手
(田中景子選手筆)

5. 東戸塚商店会誕生について

Team 東戸塚（東戸塚商店会）会長 森田 達美

東戸塚駅が出来て、38年位でしょうか？まだ新しい駅と言われてはいますが、まったく横の繋がりが無い事に不安を抱き、この街はこれで良いのか？そんな思いを共有する人達から物語は始まりました。

この地で商売をしたり、会社を経営したり、最寄り駅が東戸塚だったり、色々な方が「すぐそばに」いらっしゃいますが、どこの誰がこのお店をやっている

のか？どんな会社なのか？隣に住んでいるのが誰なのか？を知る人は少ないのが現状でしょう。現代では、それが当たり前の世の中ですが、東戸塚に関わりあるものとして、本当にそれで良いのでしょうか？もし、この東戸塚に生きて行くなら、やっぱり知り合いは多い方が良い！という数名の有志で立ち上がり、まずは地域の方々に声をかけて集まってみようと動き始めました。手探りで地図を広げて、どこに何のお店や会社や病院、塾や銀行、何の会社かも知らない多種多様な場所に皆で足を使い、声をかけて、集まりませんかと動きはじめました。

その有志達が一つの思いを共有するために一番初めに掲げたのが「未来の子供達に誇れる街」というスローガンでした。このスローガンの元にどれくらいの方が参加してくれるのだろうと思いながらも、少しずつ手ごたえを感じながら、当日集まって頂いた人数は約160人にもなりました。2018年2月22日のことです。はじめに10人ほどの有志が集まった2017年12月から約2ヶ月間、こんなに沢山の方々が横のつながりを求めていたんだ、と実感できた会合でした。その行動力をみて素晴らしいメンバーが東戸塚にいることを確信しました。

私達はそこから手探りで、商店会発足に至るまで何度も集まり、意見を交わし合って、とにかく出来ることから始めようと熱い思いを語り合い、2018年4月1日、正式に東戸塚商店会を立ち上げる運びとなりました。

商店会とは、商売をしている人達の会と思いきや浮かべますが、私達の考えはちょっと違います。商店や会社は、仕事をし利益を上げ給料を頂き個人や社員の生活を守るのが目的でしょう。それは個々の会社や商店の努力や政策、考え方など様々な思いで動いていく社会でしょう。私達は、商店会に直接的な利益を求める事は違うと思っています。商店会は人と人の繋がりを大切にし、商売の目的から少し離れて相手を知る事から始めています。商店会に入るメリットはそれぞれのお考えですが、メリットは商店会のメンバー各自が自ら考え、意見を交換し、成長していくのが目的で、みんながメリットになるよう話し合いをします。会費を払い、時間をとられ、考えも出していかなければなりません。しかし、そこには人とのつながり、団結力、地域のために少しでも役に立ちたい思い、お金では買えない人の心を思う気持ちなどが育まれると思います。そこにはすぐに効果の得る利益はありません。努力して行動して人とつながって、あとから利益が付いてくると信じています。

発足してわずか1年足らずですが、活動実績を紹介いたします。

4月に「ふれあい桜祭り」を開催しました。これは、地域の店舗さんが協力し合って、品濃中央公園で行いました。土日の2日間で5000人位の動員数になり、飲食店、物品販売や展示、美容関係から大工体験まで色々な出し物で、子供達も大喜びでした。

そして、毎月の清掃活動です。これは、東戸塚駅周辺を商店会のメンバーと

ボランティア有志で行っていますが、ハマロード・サポーターに登録しております。これは地域の身近な道路を対象に、地域のボランティア団体と行政が共同して、身近な道路の美化や清掃等を行っていきこうという制度です。これからは、地域の企業様と協力し合い、近隣の子供達も巻き込みながら一緒に掃除をして行こうと考えています。子供達には、いろんな人たちと触れ合いながら自分の街をキレイにし、街の人たちと元気にあいさつのできる環境を提供してあげたいと考えています。たかが掃除と思わないでほしい。キレイな街作りは掃除をするだけでなく、人との触れ合いの中から心もキレイにしていく行動なのです。

はしご酒ライブは9月に開催しました。Team 東戸塚の青年部が中心となり、協力店舗を募り、お得意の行動力で33店舗の飲食店を巻き込んでのイベントになりました。どうすれば上手くいくのか、若手たちは日々悩み、行動しました。飲食店さんもそれぞれのお考えもありますが、ある程度のルールを決めて一つにしていく作業は大変な行動力だったと思います。我々幹部は安心して見守るだけでしたが、見事大盛況に初開催を終えることが出来ました。これも青年部の引っ張る力とボランティアのメンバーがいたから成功したんだと確信しております。

この先も商店会は全員で意見を出し合い、考え、東戸塚で根を張って行動し、感動を与えるチームとして大きくなることでしょう。次に仕掛けるのは「ユニバーサルマナー検定」という資格を商店会メンバーで取ろうと考えています。これは高齢者や障害者への基本的な向き合い方や、声かけ方法を学ぶものです。2020年の東京オリンピック・パラリンピックにむけて、また、すぐそこに迫っている高齢社会に生きて行くうえで大切なものととらえ、実施を決定しました。

さて、私達はこれから先、何十年も後世に「未来の子供達に誇れる街」を育てて行けるのでしょうか？まだ物語は始まったばかりです。



東戸塚商店会の発会式（2018年2月）

6. 戸塚カントリーの誕生

戸塚カントリー倶楽部は、現在の戸塚区（川上町・名瀬町）と旭区（大池町）と泉区（緑園）の3区にまたがる山林を造成して開発された。昭和33年11

月「神奈川開発観光株式会社」が設立され、用地の買収が始まった。

朝鮮戦争の後の不景気の時代で、住民の生活様式はまきからガスや石油に移行し、雑木林から抽出する木の利用は大幅に減少していった。このために山林の開発機運が急速に高まり具体化して。買収価格で少しもめたが、昭和35年7月に戸塚カントリー倶楽部が設立された。



戸塚カントリー倶楽部 HP より

昭和36年12月に川上コース（現、東コース）18ホール。昭和37年10月に名瀬コース（現、西コース）18ホールがオープンし、総面積56万坪36ホールの本格的ゴルフコースが誕生した。都心からの利便性がよく多くのゴルファーがプレーしている。

日本プロゴルフ選手権やキャノンオープンなど日本を代表する男子プロの大会が開催された。

7. 前田町の古地図の由来

前田町内会館には縦横2mにも及ぶ「古地図」が大事に保管されている。この古地図の由来を前田ハイツの小林 功氏が2017年6月に調査され、その結果を次のように報告されているので紹介しよう。（一部編纂委員会にて校正）

○何時頃の作か

この古地図には作成年月日が書かれていませんが、明治8年(1875)頃の作で、本年は2017年ですから142年前になります。

○地図を作成した理由

明治6年(1873)に明治政府は「地租改正」という法律を公布しました。「地租改正」とは、旧来の土地所有者を土地保有権者として確定し政府が地券を交付しその地券に記載された地価に基き地租（国税）が賦課されました。

また明治政府は（明治5年から11年の間）地方行政区画の一つとして全国に亘ってその区を大小に分け、従来の町村を包括し、大区に区長、小区に戸長をおいたとあり、前山田村も明治7年平戸村などと共に「大17区4小区」となり、同11年11月の郡区町村編制法で鎌倉郡に属し「旧村」に戻ったと「戸塚史」（区制50周年記念版）に書かれています。

従って、上記の理由から、正確な土地所有者名、地目（畑地）、反別（①田畑を1反ごとに分ける事 ②田畑の地積の称 ③反別割の略）、反別割-田畑の反別を標準として賦課する、それらを記入した図面を役所に提出する様に通知を受け、それに応えた図面です。

○この古地図の意味

古地図に 向かって右の下方には、表題として「曲尺以壹分擬壹間」と書いてあります。「^{かねじゃく}曲尺の^{いちぶ}壹分を以って^も壹間に擬した^{いっけん}図」と読み、意味は、壹分（約3ミリ）で1間（約1.8メートル）を表している図面となります。

その横に書いてある文字は、前山田村の総面積と内訳が書いてあり、田10町6反余、畑7町6反余、山林21町反余とあります。

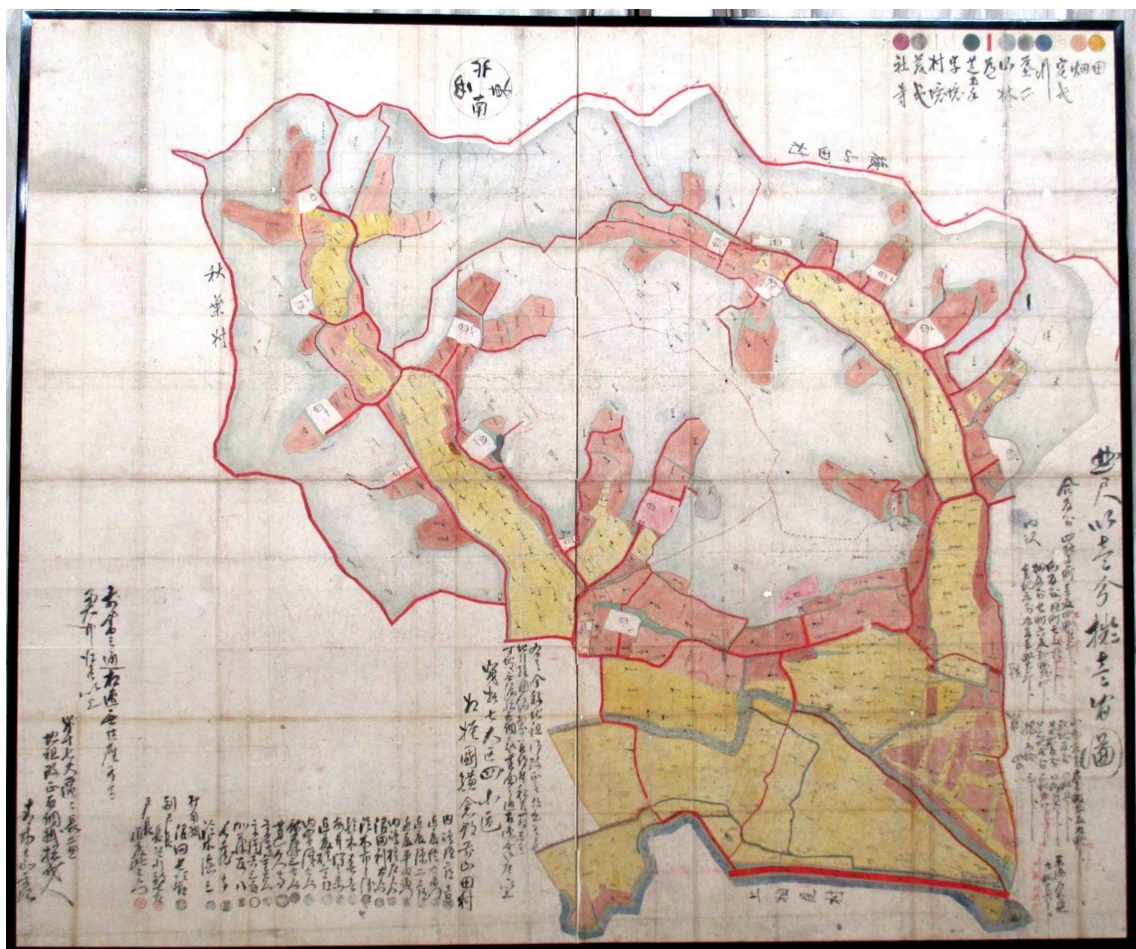
明治9年の前山田村の家数は22軒、人口は101人と戸塚史にあります。

前に戻りますが、この土地の所有者が自分の持ち分について間違いの無い事を署名捺印しています。

日本で平民が苗字を付けるようになったのは、明治8年2月3日以降と言われています。従って、この地図は、明治8年以降11年の旧村（郡村制）に戻る間に作成されたと思います。

最後に、この一文には、戸塚歴史の会会長及川治雄氏、地区連合会会長田中猛氏、ハイツの浮須明宏氏にご協力をいただき感謝しています。

参考資料として「戸塚史」（区制50周年記念版）、「資料が語る横浜の百年」（横浜開港資料館）等を参考にしました。



8. 秋葉の記憶を辿る

平成30年7月31日 秋葉町 高橋 正夫

秋葉は、鎌倉や横浜港に近く、国道1号線、東海道線、柏尾平戸永谷川に並行した小さくても東南に広がり山を北に背負う、視界の風光明媚な田園、地政学的な利を得たところである。秋葉の上空には常に気が満ちて舞い、その気は柏尾川に溶解して江の島に流れ、太平洋にそそいで循環している。

秋葉は日の出と共に始まる。森鷗外作詞の横浜市歌のごとくである。

「我が日の本は島国よ 朝日輝ふ海に 聯^{つら}なり峙^{そぼだ}つ島々なれば あらゆる
国より舟こそ通え されば港の数多かれど 此横浜に優るあらめや むかし
思えば苦屋の煙 ちらりほらりと立てり処 今は百舟百千舟 泊まる処ぞ見
よや 果てなく栄えて行くらん御代を 飾る寶も入り来る港」

(天皇陛下の治世を彩る文化)

現在のわが家は、おおよそ築140年、祖父は近衛兵を拝命された篤農家で子供13人、富国強兵に忠誠をつくした。草葺屋根の母屋を瓦に改修した時には納屋と味噌部屋を壊して半分の大きさとなった。

小生72歳、終戦後間もなくこの家に生まれ育ち、人生100年に挑戦している。幼少時、横浜港の汽笛やドンタクの音が聞こえた。掛け干し・炭焼き・牛・ニワトリの飼育と何でも手伝った。米の収穫の半分は供出だった記憶は、つい最近のここのように思える。真っ黒になって竈で炊いたご飯に、薪で沸かした風呂、実にいい時代であった。

(1) 拙い記憶と短い歴史

- ① 村の鎮守の杜、神仏分離でも「増威八幡社」と「長蔵寺」は神仏習合にある。神社の参道は東海道柏尾まで一直線であったようだ。子供の頃、農道として残っていた。
源義家の奥州征伐の凱旋に「威を増す」戦勝記念とされたと云われている。
神社の弁財天は遠く江の島の弁財天(日本五大弁天の一つ)の方位を向いている。
- ② 念佛講中は15戸が毎月15日持ち回り念佛を中心に、祭り、田植え、堰管理、茶摘み、屋根の葺き替え、道普請、葬儀など講中の互助協働。論語「徳は孤ならず 必ず隣なり」
- ③ 秋葉町には横浜で仕事をしていた興行師が住んでいたことで、昭和22年、夏の例大祭に美空ひばり、当時9歳を戸塚駅までリヤカーでお迎えして祭りを盛り上げた。「東京キッド」などを披露した。ひばりは赤飯や煮しめを食べすぎてお腹の具合を悪くしたエピソードがある。
- ④ こどもの教育、秋葉幼稚園は昭和29年設立。市の払い下げ古材を貰い受けて村人が寄って建設に従事、周りは田んぼと畑ばかりで園児はいない。進駐軍の払い下げバスで遠くから園児を送迎した。
- ⑤ 昭和35年大倉陶園に現天皇・皇后両陛下が結婚後に行啓され、街道で国

旗を振って歓迎した。

東海道線車窓からひらける秋葉には、宮内庁御用達企業の創業家がお住まいであり秋葉に温室があった銀座千疋屋をはじめ、東京文明堂や、進出企業の大倉陶園などは当時の社長が我が家の裏の山手に住まわれた。更に紀文横浜工場もそうだ。

家から見える視界は広く赤関橋から不動坂辺りまでが見わたせた。柏尾町にあった川上小学校の授業中に1号線を走る戦車の凄い音が聞こえた。

三叉路には木の梯子で作った火の見櫓があり、大倉陶園の脇に消防小屋があった。名瀬道路の秋葉バス停近くには萱山があつて村の萱葺き屋根の葺き替え用萱の萱刈り場があった。萱葺き屋根の葺き替えには村の念佛講中の仲間が集まり作業をしていた。葺き替え工事が終わると唯一の楽しみがあつて、それは養豚を営む仲間から1頭の豚を譲ってもらい大きな鍋に野菜などを入れて煮込み、酒の肴に35度の焼酎を飲みかわし労をねぎらい村人の団欒のひと時を過ごしていた、まさに「互助協働」である。

秋葉第4公園附近には洋風の赤い三角屋根の千疋屋があり子供のころ学校で写生をしていた。殆どの生徒はその風景を
楽しそうに描いていたのです。



川上小学校 記念写真 背景秋葉 齋藤君江氏提供

(2) その他・誇れる近隣・川上の歴史

幕末安政6年(1859)品濃町には新見正興(新見豊前守)が居られ、遣米使節正使とし、村垣範正副使と目付小栗忠順で、総勢77人の使節団のためにアメリカ海軍が用意してくれた米軍艦船のポーハタン号で渡米。日米修好通商条約「安政5ヶ国条約」を締結する。

同時期、正規の新見使節団の他にもう一隻船を出し使節団に万一の事が起きたときのスペア的な役目を担っていた。さらにアメリカに着いたことを確認する役目の派遣団を結成した。この任務に就いたのは軍艦奉行木村喜毅と艦長格の勝海舟であり、船はオランダで建造された咸臨丸であった。

以上、あらためて郷土の歴史を思い出し、歴史を刻んできた先人の思いや苦労があつての今日であることに敬意を払い、秋葉の歴史を矜持している次第です。

9. 歴史を語る秋葉遺跡（秋葉町57）

秋葉遺跡と秋葉第4公園の碑石

昭和54年11月、秋葉ハイツ建設申請を受け、横浜市が周辺の土地の試掘を行った際、遺跡が発見され、同55年に秋葉遺跡学術調査団が編成され遺跡調査が行われました。



秋葉第4公園の碑石

その結果出土された遺跡の概要は、

出土遺構 住居跡17（弥生10、古墳7）、方形周溝墓1（古墳）、
溝状遺構（古墳）、土墳5（時期不明）

出土遺物 土器片（弥生～古墳）

これらの遺構は、「弥生から古墳時代に及ぶ集落で、柏尾川流域で発見された数少ない複合遺跡と言えるもの」であるため、「文化財愛護意識の普及啓発に資する顕彰碑を公園内に設置」と理由書に記されています。

秋葉第4公園内に設置された黒御影石の碑石に刻まれた碑文は以下の通りです。

さんさんと陽光あびる南を向いた台地は人間にもっともよい居住環境を提供してくれます。

この地は弥生時代、古墳時代から、すでに古代人の居住地として選択された場所です。発掘調査によって、両時代の住居跡などの、遺構が発見されています。古墳時代の住居跡には附帯設備の「カマド」が伴って発見され、それらの遺構の一部は地下に永久保存されました。

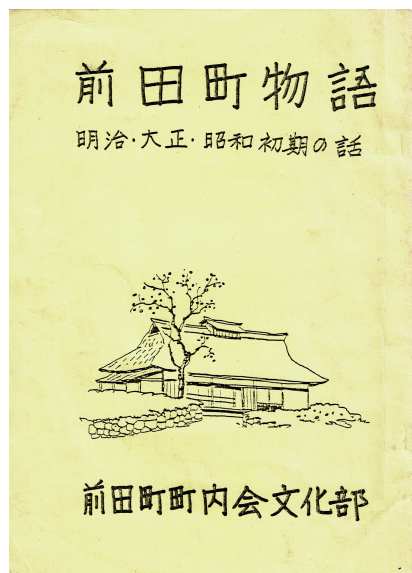
20世紀末の今日、この地はあらたな人間の居住地として開発され新しい営みが開始されました。

昭和57年1月

横浜市

10. 「前田町物語」の紹介

町内会館の書庫の中に黄色の表紙のB5版の小冊子が保管されている。昭和61年10月5日、前田町町内会 文化部発行であり、B6版・ガリ版摺り・12頁、「前田町物語」として22の話が綴られている。昭和60年頃の会報（「会報まえだ」として、昭和59年5月から毎月発行され、平成30年10月で414号）に連載され、昭和61年10月に前田町町内会文化部が冊子にまとめたものである。平成29年12月発行「会報まえだ」から紙面に余裕のある時に再掲し、明治初期からの前田町の様子が伺え、好評を得ている。



前田町物語 昭和61年



収録ページの例

ここに一部を紹介したい。内容は原文のままである。

はじめに

町内会会長 木内 義一

前田町は、都市化の波の中で大きく変わろうとしている。そして、私たちは飽食の時代と言われる中で、かなりゆとりのある生活をしている。

しかし、このようになったのはせいぜい30年くらい前からのことである。大正・昭和の初期以前にここに住んでいた人たちは、どのようなくらしをしていたのだろうか。

古きを温めて新しきを知るという言葉がある。そこで、以前の町の姿を知るために、内島寅吉さん、鈴木健三さん、鈴木一静さん、鈴木恒雄さん、内嶋次郎吉さん他、何人かの話聞き、会報に連載させていただいた。これが、前田町物語である。

希望の方に読んで戴けたら幸いです。

前田町物語 1 自然について

昭和の初めから30年代の前田町は、自然がいっぱい残っていたいへんのどかな村里でした。夏になると山には山百合やなでしこが咲き、せみやきりぎりすがやかましいほど鳴いていました。平地は田や畑が多く、かえるがやかましいほど鳴いていました。どじょうはどこにもいて、小川には鮒やめだかが泳

いでいました。大きなうなぎもときどきとれました。品濃口から赤関橋までの川は、せきで深く水がたたえられていましたが、底が澄んでいてプールのなかった時代の子供たちのかっこうの泳ぎ場所でした。学校では泳ぐことを禁じていましたが、子供達は学校の帰りなどもカバンを置いてこっそり泳いだといいます。

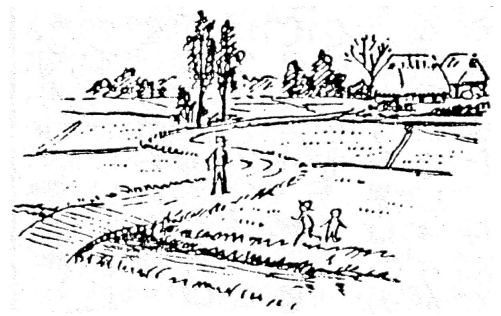
夜になるとほたるもよくとんできました。列車の窓から投げすてられる弁当がらなどの残飯をあさって夜になるとタヌキやキツネがうろついていたといひます。夜キャンキャンというキツネの鳴き声を聞いたことがあります。また、近所の家で何頭ものタヌキを捕えて、たぬき汁にして食べたという話も聞きました。

一ばん最近では、昭和43年付近が開発されてしまったためか百キログラムもある大いのししが大昌電気の庭にあらわれました。そこで社員が大勢出つかまえ味の素研究所にあずけたという話もあります。

ともかく 今から考えると夢のような自然の中の生活が長い間つづいていたのです。

(木内記)

※文中 大昌電気は前田町 209-5 現在マンション「ヴェレーナ東戸塚」の場所で、主に通信機器に使用する電線メーカーの工場であり、味の素研究所は前田町 214 日枝神社の丘 現在マンション「グランドメゾン東戸塚」の場所であり、家畜飼料の研究開発等も行ってた為か、実験用の家畜を飼育していた。



田園風景のさしえ

前田町物語 9 けもの道・堂屋敷・弁天前

今の前田町の少し小高い部分はほとんど山林だった。この間に谷戸が入りこんでいたが、この谷戸を結ぶ道が山の中に三か所あった。お寺（蓮久寺）のところに一つ。近藤義雄さん（前田町町内会館の近く）の近くから一つ。内島寅吉さん（前田町 491 付近）の上の一つ。寅吉さんの上の道は公道だったが、みんな峯道で人が通ってふみかためた、いわゆるけもの道とかいたち道とかいわれる山の中の細い道だった。ぐるっと下を回ればよい道があったが近道としてよく利用された。

今の味の素のあたり（味の素研究所のことで現在マンション「グランドメゾン東戸塚」）を堂屋敷といった。そこに行くには、味の素の正門のあたりからのぼって行ったが、今の年寄の子供の頃には、もうお堂はなかった。聞いた話によると昔貧乏な村だったので、お堂を平戸に売ってしまったのだという。寅吉さんの若い頃その畑を耕していたが、その近くの山林のところに石塔みたいなものが残っていて肥桶をぶつけて叱られたという。

小糸工業の裏（工場の北側、国道1号の反対側）の木内・吉田・小園さんのあたりを弁天前と言った。今の小糸工業の駐車場（前田町249 パチンコジョージ跡西側）あたりは味の素の山続きで山林だったのを、国鉄が出来る時低くして畑になった。弁天様が祭ってあったというのは言い伝えでだいぶ古い話である。そこに斎藤ソノさんというお婆あさんがいたが、念仏講などがあると、「今

前田町物語(9)

けもの道

堂屋敷・弁天前

原書風のレイアウト(原書は縦書き)

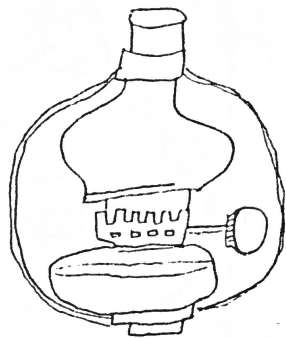
度は弁天様だよ。」
 と言って出かけたものだという。このあたりは大きな杉林で、ジョージホール（パチンコジョージ跡）隣（南側）の鈴木元吉さん屋敷（前田町236）

のあるあたりは、元田んぼで「森の脇」と呼んでいたという。山林と畑と田の前田町の時代の話である。

（内島寅吉氏の手記から）

前田町物語15 昔の住居（体験で綴る農家の大正・昭和の初期から）

昔の農家は、どこも大きな草屋であった。入口には、六尺の大戸があって、ふだんは戸についているくぐり戸を明けてたてして出入した。土間は広がったので、雨天の時にはわら仕事をした。このような時には戸を開けて物の出し入れをした。



ランプのさしえ
 でしたものだった。

座敷は土間から広間、奥の間へと続き、大きな家だと中的間があった。土間の奥にはかまどがあり、そのかまどは餅つきや味噌・醤油を作る時に使う大きなかまどと、飯を炊くかまどが二つ三つ並んでいた。そして、土間から台所につづく部屋には、大きな炉があった。また母屋の土間の上には、たたみ一畳くらいの炉があって、ここで木の落ち葉や、松葉など焚き火をして、色々のおかず物を煮ながら家族は団らんし、親しい人との応対もここ

祝い事、弔い事の時は、奥と広間のしきり戸をとりはずして会場にした。こうした人よせの時には、隣近所で助け合ってやった。今でも私達は昔の習慣を続けている。組の方は九軒で、沼田平亮さん、鈴木健三さん、内島源太郎さん、鈴木イキさん、蓮久寺さん、沼田ヤスさん、内島仲次さん、内島あささん、それに内島寅吉だ。

どこの家でも、七・八十年以上たった家ばかりで、見渡すものすべてが黒光りしていた。なにせ家の中で焚火をするので、木や木の葉がしめっていると家の中じゅうもうもうと煙ってしまうし、巻き上がった灰は落ちるし、塵は舞い

上がるなどして大変なものだった。どこの家にも、もしき小屋、くず小屋といった焚火小屋があった。そのほか穀倉、堆肥小屋、物置などが母屋の付属建物として設備されていた。火種をたいせつにし、昔の人は1本のマッチも無駄にしないように工夫して、付木で火をつけていた。そのため、炉やかまどの中に種火をいつも残しておいた。(内島寅吉 記)

※

木内 義一氏

大正13年生まれ(1923-2001)小学校の校長先生を務められ、昭和58年から平成7年まで長きにわたり前田町町内会長を務められた。

内島 寅吉氏

明治43年生まれ(1910-1994)前田町生まれで農業に従事し、老人会「相和会」の発足に尽力し、永きにわたり会長を務められた。体験及び人々のくらし等がノート3冊に綴られていて、それを基に「前田町物語」が発刊された。

1.1. 柏尾地区の先人たちへ感謝をこめて

私たち柏尾地区では、平成24年と同27年の2度に亘り「柏尾の100年史」として地域の歴史を編纂し、記念誌を会員の皆さんに配布させていただきました。そしてその冒頭に「望郷の念に駆られ、生きている間に歴史の1ページにたとえ1行でも良い、その記録を残したい」と記しましたが、今回の「川上の100年史」を発行するにあたり、この3年間に亡くなられた偉大な先人3人について誌面を借りて紹介させていただきます。

(1) 加藤榮作氏の遺品から

(資料提供：飯田裕子氏)

加藤榮作氏略歴

加藤榮作氏は、大正15年(1926)11月に現在の戸塚区柏尾町に生まれました。地元の川上小学校を卒業され、昭和22年に川崎市役所に入庁、昭和58年には川崎市高津区の区長に就任された経歴をお持ちの方です。柏尾町内会では老人会(柏和会)の会長を長く務められ、先の「柏尾の100年史」には貴重な資料の提供をいただき、戦争体験も語っていただきました。榮作氏の協力がなければ、「100年史」はかなり寂しい内容になってしまったと思っています。

そんな榮作氏は、平成29年2月に90歳で亡くなられましたが、その後遺品を整理された遺族の方から「遺品を片付けていたら色々なものが出てきた。とても捨てられないので町内会として保存できないか」との相談を受け、ありがたく頂戴する事となったものが、次のようなものでした。



加藤榮作氏

- ・各種地券 24枚
 - ・川上小学校 文集「七つ星」 第26号 昭和10年9月1日発行
 - ・交通事業創業40周年記念乗車券 3枚 昭和59年10月
川崎市交通局発行
 - ・「思い出に残っているもの」加藤昭夫書(榮作氏の弟) 平成19年7月10日
 - ・「洋々友の会」会報 川上小学校同窓会会報 平成24年6月
- 等々

今回は上記の中から2つのものを紹介させていただきます。

①「思い出に残っているもの（戦前編）」 H19.7.10 加藤^{てるお}昭夫書（抜粋）

行事： 遠足、運動会、学芸会、小6の時の泉岳寺徒歩のお詣り、正月三が日の早朝神社初詣、夏休みのラジオ体操、お天王さま、お召列車のお見送り、奉斎殿、二宮金次郎の像、餅つき、稲荷講、団子さし、青々とした稲田（ずい虫取り）→ 黄金の波、火の番小屋に詰め拍子木を叩いて夜回り

近所： 略

行商： 乞食、チンドン屋、紙芝居、十銭屋、イワシコーイ、むきみ屋、彦ちゃんとマス屋、金太郎飴（頭に乘せた樽に万国旗）、らお屋、太田胃散、自力健康器

風物(1)： 蚊帳ホタル、露天風呂、クルリ、大八車、肥桶、脱穀機、つらら、石臼、天の河

食い物（思い出に残っているもの） ①自分が川で獲り父がさばいたかば焼き、②くらつぼのお汁粉、③横須賀の天井、④神田須田町食堂のカレー、⑤天王様の帰りに父と飲んだ氷水 ◎日常のご馳走→カレーライス、卵かけ御飯

風物(2)： 夜中ののみ取り、裏庭のトイレ（室内は父の専用）、1ケ5銭の饅頭は買えない

商店： 柏尾の長谷川豆腐店、齋藤肉屋、饅頭屋（戦後アイスクャンディ）、下駄屋（森武治君の店でせんべい3枚か鉄砲玉3ケ（飴）各1銭

風物(3)： 蠅取り紙、練炭火鉢、鉄びん、こん炉、へっつい、くず（松葉）、1升釜、むしろ、5羽のにわ鳥、石炭、すいこ（井戸水を汲み上げる）、火鉢、こたつ、つばめの巣があった、薪割り、わら屋根の母屋と物置、納屋ととり小屋

食い物(2)： 柿、栗拾い、焼きビン、トーモロコシ、マクワ瓜、西瓜、かぼちゃ、さつま芋（毎日あった）、じゃが芋の味噌汁、漬物、魚、揚げ物、焼きのり、たまに鮭かんや豚肉料理、キッコーマンの味噌樽、トースト、牛乳（父の専用）、新潟産の白米、さんまの塩焼きにおなめ、手打ちそば、カリント風のドーナツ味の菓子（うまかった、母）、おむすび（菓子のない時おやつ代わり）

あそび： コマ、メンコ、凧揚げ、陣取り、母艦水雷、竹馬、かい掘り、たにし、ドジョウ、ふな、アメリカエビ、双葉山、日光写真、戸塚の夜店のカー

バイトの臭い、戸塚競馬場の見物（5 銭のキャラメル）

読み物： 少年倶楽部、家の光、講談社の絵本、グリム童話、アンデルセン物語（人魚、小人、魔法使い）、ギリシャ神話、一寸法師、桃太郎、かぐや姫、浦島太郎、いなばの白兔、他

◎学校図書館で一番本を良く読んだと表彰（小 3）

②地券について

日本が近代国家に生まれ変わる以前は、土地の測量は時の政府が「検地」という形で実施し、それを検地帳に記載していた。この検地帳に基いて、明治政府が土地の所有権を示すために発行した証券が地券である。今の土地の権利証に当たるものと考えられる。

写真の地券は、榮作氏の曾祖父にあたる加藤民五郎氏に明治 13 年神奈川県が発行したものの。



地券 加藤民五郎 明治 13 年発行

（ 2 ） 前柏尾地区連合町内会長 瀬田正一氏の思い出

瀬田正一氏略歴 （資料提供：瀬田大介氏）

瀬田正一氏

昭和 19 年 8 月 28 日 島根県安来市 生まれ

昭和 32 年 3 月 安田小学校 卒

昭和 35 年 3 月 伯太中学校 卒

昭和 39 年 3 月 松江工業高等学校(定時制)卒

昭和 39 年 4 月 坪井工業株式会社

入社により上京（川崎市）

昭和 53 年 川崎市川崎区から

横浜市戸塚区へ転居

平成 14 年 60 歳で定年退職



瀬田正一氏

柏尾台に移ってからは、自治会の体育指導委員として長年活躍され、その後人望を買われて平成 17 年から 12 年間自治会長を務められ、地域の諸行事の先頭に立ち活動されました。中でもスポーツ活動には特に力を入れられ、地元

ペタンクチームが全国大会で優勝されたことは記憶に新しい出来事でした。

更に、平成22年からは地区連合町内会長として7年間その重責を全うされ、地元だけでなく戸塚区全体の自治会町内会活動にも大きな影響を与えられました。

そんな元気一杯の瀬田氏でしたが、平成29年の春頃から体調を崩され、同年8月9日多くの方に惜しまれながら73歳の人生を終わられました。



瀬田氏が亡

ペタンクチームとともに

くなる直前、郷里の島根から持ち帰ったものに「軍隊手帳」（写真参照）があります。これは柏尾小学校の郷土資料室のリニューアルと本「川上の100年史」編纂に合わせて持ち帰ったものですが、亡くなった後瀬田夫人から保存を依頼された貴重なものであります。

この軍隊手帳は、瀬田正一氏の祖父にあたる「瀬田清太郎氏」のもので、明治15年(1882)に出された明治天皇の勅諭から始まり、本人の履歴や軍隊での経歴が詳細に記述されています。



分區小大服被裝著時暇	籍族貫本	科兵	管所
靴 套 外 袴 帽	島根縣平氏	歩 兵	第十七師團
拾三三分	六號	瀬田清太郎	上等兵
所 住 特業 身長 生誕	島根縣能義郡安田村字 安田始考番屋敷	明治四十四年七月式日 五尺六寸五分	歩兵
	通信	瀬田清太郎	歩兵

軍隊手帳 瀬田清太郎 明治44年入隊

その中からいくつかを紹介しますと、

瀬田清太郎 島根県平民 善衛門長男 明治24年7月24日生れ

住所 島根県能義郡安田村大字安田13番屋敷

特業 通信、身長 5尺3寸5分(162cm)

明治37年母里村高等小学校卒業、農業

等々が記され、明治44年(1911)に徴兵されて陸軍歩兵第63連隊第5中隊に配属されたとあります。そして大正10年(1921)に召集が解除されるまで数度にわたり軍務に着かれ、最終的な階級は上等兵となっております。

この軍隊手帳の巻末に清太郎氏の手書きと思われる筆で、「大正2年11月16日生れ 瀬田幸吉」として、正一氏の父君である幸吉氏の誕生が記され、そしてその幸吉氏の三男として正一氏は生まれました。(長男、次男、長女、正一氏)そして実家の農業を長男が継がれた関係で、前述のように就職して川崎に出てこられたこととなります。

生前の瀬田正一氏の功績を偲び、心から冥福をお祈り申し上げます。 合掌

(3) 柏屋商店 金子基社長について

(資料提供：金子トシ子様)

金子基(もと)氏略歴

昭和9年10月14日生

栃木県芳賀町出身

昭和28年3月 栃木県立

真岡高等学校卒業

合資会社柏屋商店 代表社員

平成30年3月15日

永眠 83歳



金子 基氏
(2013年撮影)



昭和32年頃の柏屋商店

柏尾の不動坂交差点脇に古くから「柏屋商店」はあり、その社長の基さんを知らない人は地元ではないという程の有名な方であったが、平成30年3月惜しまれながらその生涯を閉じられました。

この柏屋商店の歴史を平成24年発行の「柏尾の100年史」で紹介していますので一部を改めて載せさせていただきました。

「創業昭和7年、酒類、食料品、タバコ、塩、雑貨小売の看板で国道1号線沿い、鎌倉郡下柏尾不動坂に地域のよろずや的な店として開業致しました。

お客様は地域の農家の方が多く、立ち飲みコーナーもありましたので、野菜を市場へ出荷した帰りにお酒を飲みながら次期農作業準備やご家族の話などの世間話が興じられ酒屋は情報交換の場所でもありました。

店の仕事は朝の掃除に始まり、当時は樽詰めの味噌や油をはじめとして計り

売りが多く、酒や醤油は専用の徳利を使用しておりました。又、この徳利の水洗いには店前の水量豊富な井戸を利用しており自然にも恵まれていました。

午前中は御用聞きをして、午後から荷造り、夕方までに自転車やリヤカーなどでのお届けでしたので、農道が多い舗装されていない道を運ぶのにも技が必要でした。

集金は年2回の〆通帳で半年分の計算をして請求をしますので、年末などは忙しく、平行してお正月用の酒などの配達もあり、新年の準備は除夜の鐘を聞きながら致したものです。休みは年2回の盆と正月位なものでした。・・・」

こうした「商売人」としての誠実な姿勢と、また親しみやすい人柄もあって町内会では副会長職を長く続けられ、近年は柏和会（老人会）の副会長としても活躍してこられました。金子さんは常々酒の席で「おれが戸塚警察署の代々の署長に酒の飲み方を教えた（?!）」と口癖のように言っておられました。交通安全協会の役員をやって来られた関係で誰も疑問を挟む人はいませんでした。

多分、今頃「向こうの世界」で楽しくお酒を飲んで騒いでいるのでしょう。

金子さん、本当にありがとうございました。

1 2 . 横浜市立大学 木原生物学研究所の紹介

寄稿：横浜市立大学木原生物研究所
所長 木下 哲

横浜市立大学木原生物学研究所は、横浜市立大学の附置研究所です。舞岡リサーチパーク内に位置しており、最先端の実験機器類から実験圃場*まで整備されています。個人の名前を冠した日本では珍しい研究所であり、日本が誇る近代遺伝学の創始者の一人である故木原均博士(1893～1986)が昭和17年に創立した財団法人木原生物学研究所を礎として、昭和59年に横浜市立大学に移管されました。横浜市の地域振興と産業発展のために、平成7年に舞岡の地に新しい建物を建設し、国際文化都市横浜にふさわしい研究所として再出発しました。



* 実験圃場とは研究に必要なコムギなどを栽培するための土地

所在地：横浜市戸塚区舞岡町 641-12 TEL：045-821-1900

アクセス：横浜市営地下鉄ブルーライン「舞岡」駅徒歩10分

植物科学に特化した研究所として

木原均博士は、コムギなどの高等植物に関する細胞遺伝学の偉大な業績で「ゲノム説」を世界に先駆けて提唱しました。現在、ゲノムが保有する遺伝情報の解析は、それぞれの生物を特徴付けるための必要不可欠な科学的手段とな



っています。

木原生物学研究所では、主に木原博士のグループが世界中から収集・保存している数千系統のコムギや数百系統のトウガラシを用い、そこから集めた遺伝情報を基に遺伝資源を有効に活用する研究、それらのリソースをゲノム情報に置き換える研究、ゲノム情報を基に現象を解明し実生活で役立てる研究、

さらには植物の根本的なしくみの解明などを行っています。これらの研究は、世界的に権威のある学術雑誌に多数掲載され、高く評価されています。理化学研究所をはじめとした国内外の著名な研究機関等とも連携し、最先端の植物科学研究を展開するとともに、持続的な食糧と環境問題解決への貢献をめざしています。

また、研究所の教員は横浜市立大学大学院生命ナノシステム科学研究科の専任教員として、学部生と大学院生の教育に携わっています。

舞岡をはじめとした地域への貢献

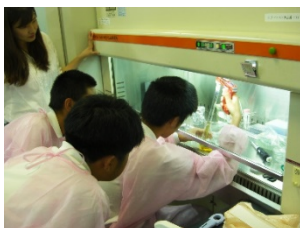


木原生物学研究所は、地域貢献も積極的に行っています。

本研究所の建設当初より、地域の方々と「地域交流会」を通して、研究所への理解を

深めていただき、情報共有を図っています。

また、年に一度、研究所の施設を公開し、本研究所で行っている研究紹介の他、小・中・高校生向け実験プログラムや本研究所所属の教員・研究者による講演会等も実施して、植物科学分野への理解を深めていただく場を設けています。年に数回、主に生命科学分野を中心とした幅広いテーマで、一般の方に向けた講演会も行っています。



近隣の小・中・高校とも連携し

ています。小学校での「総合学習の時間」では、1年間かけて植物



に関する学びへの協力をしており、研究所の見学やコム

ギを主とした植物のしくみから食物として社会の中でどのような役割を担っているのかということまで、幅広く考えていきます。中学校との連携では、「研究者」としての職業体験を受け入れ、施設内の実験室で普段の授業で使わないような研究機器に触れられる機会を提供しています。高校との連携では、主に科学クラブの生徒を対象として、科学実験の実習体験を行っています。

木原記念室

木原生物学研究所の創立者である木原均博士の功績を示す資料や遺品を展示し、さまざまな角度から博士を紹介しています。

平成22年には天皇皇后両陛下が行幸啓されました。一般の方にも公開（祝日及び年末年始を除く火曜・木曜10時～16時）していますので、お気軽にお越しください。



ゲノム説の先駆者 木原均博士

木原均博士(1893～1986)は、20世紀における高等植物の遺伝学・進化学の研究で数々の業績を残しました。特に「ゲノム説」の提唱、パンコムギの祖先の発見、スイバによる高等植物の性染色体の発見、倍数性を利用したタネナシスイカの作出は、世界的な研究成果として知られています。

また、細胞遺伝学をはじめ、さまざまな分野で多くの後継者を育てると共に、海外に植物探索行を重ね、日本のフィールド科学の道を拓きました。さらに、日本のスキー草創期の一人でもあり、二度の冬季オリンピック選手団長を務めるなど、スポーツ界にも足跡を残しました。

『木原記念室』は、興味や好奇心の赴くままに日々の疑問を科学することを楽しんだ、博士の限りない探究心を伝えていきます。



13. 舞岡公園計画の誕生・中止・復活の記録

南舞岡4丁目在住 粕谷 渥

昭和54年2月、それは驚愕の知らせでした。

誰もが順調に進んでいるものとまったく信じて疑わなかった横浜市の舞岡公園計画が突然中止になったという知らせだったからでした。

驚いた舞岡台自治会ではさまざま議論の末、4月の総会で地元は公園計画の早期復活を強く望んでいることを横浜市に伝えようということを決めました。

(1) 朗報、まったく予期していなかった公園計画

舞岡の山々から造成した住宅地(舞岡台)には昭和40年代、50年代にかけて市内外から多くの人々が待望のマイホームを建て、越してきました。

移り住んでみると、まわりを緑の山々に囲まれ空気がきれいで静か、夏は避暑地のように涼しいこの地を皆すっかり気に入りました。誰もが身近にある谷

戸や山道を気軽に散歩でき、子供たちが自然に触れることができるこの広大な山林や田園風景が末永く残ってほしいと心密かに願っていました。

そんな昭和48年5月、横浜市が将来の横浜を描いた総合計画を作成、その中に舞岡の山中辺りと思われる場所に自然公園をつくる構想が入っていました。舞岡台の人々にとって全く予期していなかった朗報でした。

この構想は高度経済成長政策による首都圏への人口集中で横浜市のベッドタウン化が進んだことにより市内随所で宅地開発が行われ、横浜の代名詞ともいえる丘が次々と消え、自然が急速に失われていくことに危機感を抱いた横浜市が少しでも多くの緑を残そうと考えたためでした。

その後、構想は年々具体化、はっきりと場所を決め、名称も「戸塚市民公園」とし、毎年公園調査費などの予算が計上されていました。場所は舞岡の山中の市街化調整区域内で〇不動産(株)が所有する22haの土地でした。横浜市はこれを買って公園にするという計画でした。

ところが同社は横浜市への売却には消極的でした。それは学生数の増加により東京白金から郊外への一部移転を熱望していた明治学院大学へ売却したいからでした。

このため横浜市と同社との折衝は長い間膠着状態が続いていました。

(2) 突然の公園計画中止

昭和54年2月末、前述のように突如公園計画が白紙になりました。

これは前の年に突然の市長交代があって、市政が福祉、環境保護重視から都市の骨格づくり中心へと変わる中で起きたことでした。

新たに就任した市長の判断は、横浜の町は活気に欠けている、今後は都市再開発を中心に産業を誘致し就労場所を増やす、さらに横浜には大学が少ないため市民の子弟は東京に通わねばならず横浜にもっと大学があっても良いとの考えでした。

加えて市長は横浜西部方面に2つの公園（金沢自然公園、舞岡自然公園）をつくることにも疑問を抱いていました。そこで、〇不動産(株)は早々と新市長を訪ね横浜への大学進出の協力を求めた結果、両者の考えが一致しました。

こうして新市長による初めての予算編成の際、数年続いてきた戸塚市民公園の調査費はカットされ、公園計画が白紙となりました。担当の緑政局ではそれまでの数年間にわたる精力的な努力が無となり大変落胆、地元からの強い要望でも出てこないかぎり復活はあり得ないと意気消沈しているとの情報が舞岡台に入りました。

その後まもなくして「明治学院大学が戸塚区へ、国学院大学が緑区へ移転」との新聞報道があり、予定していた場所に公園はできないことが明白になりました。

(3) 自治会総会で計画復活の取組みを決定

公園計画が白紙になったことを知った舞岡台では「市長がいったん決めたことに異を唱えても無駄だ」「いや、何とかなるだろう」「公園は絶対欲しい」「大学進出に反対すべきだ」など議論百出しましたが、次第に「黙っていたら公園は幻になる。地元として公園計画復活を横浜市に強く働きかけるべきだ」との声が次第に多くなりました。

そこで、昭和54年4月15日に開かれた自治会総会ではそれまでの経過確認した上で、大学の移転には反対しないが、横浜市が自ら作った公園計画をひたすら復活してほしい旨横浜市に強く要望し行動することを決定しました。

総会后、新たに選ばれた会長は「この問題は子々孫々に残る非常に重要な問題」だとし、自治会に「戸塚市民公園促進対策委員会」を特別に設置することにしました。

(4) 歴代の自治会長全員による「戸塚市民公園促進対策委員会」発足

13名からなる対策委員会発足に際し、舞岡台1自治会だけではなく多くの自治会が加入している川上地区連合町内会の理解協力が必要不可欠だと確認しました。

当時の川上地区連合町内会には戸塚区内の29近い自治会町内会が加わり、全世帯数1万4千余世帯、総人口5.5万人、戸塚区民の約14%を占める市内有数の大きな住民団体で、市や区、戸塚区選出の市議や県議などに大きな影響力がありました。

そこで、同連合町内会の理解協力を確実に得るためには対外折衝を経験し、連合町内会の会議に何度も出席したことがある歴代自治会長の知恵と力が必要と考え、全ての会長経験者8名にお願いし対策委員に就いていただきました。

その後、対策委員会は公園計画の復活のために市長並びに市議会議長あて陳情署名を全世帯にお願いしました。これらを目にした人々からは激励の声が数多く寄せられました。自治会役員や班長全員の真摯で懸命な努力によりたった10日間でほぼ全世帯から1,900余名の署名が集まりました。

(5) 川上地区連合町内会、公園計画復活の取り組み了承

7月25日の午後、川上吏員派出所の会議室で川上地区連合町内会の定例会が開かれ、舞岡台自治会からは会長など3名が出席しました。

代表たちは対策委員会名簿を示し、格別重要な問題なので歴代の会長全員が対策委員となっていることや署名が短期間にほぼ全員から集まったことなど舞岡台自治会一丸となって進めていることを説明、理解と協力をお願いしました。

しかしながら、当初はすんなりとは理解していただけませんでした。本当の狙いは大学の進出に反対だろうとか、横浜市に逆らうのか、丘（緑）を削った土地に住んでいる者が言うことなのかなど、かなり厳しい意見が出されました。

これに対し、代表たちは大学の進出には反対ではないこと、もともと公園計画は横浜市がつくり約束したことで単に復活してほしいと望んでいること、公園ができれば多くの戸塚区民や市民が楽しめることなどを懸命に丁寧に説明しました。

紆余曲折の末、川上地区連合町内会としては舞岡台自治会の取り組みを了承、山林を所有している地元自治会の意向を尊重しながら検討することとなりました。

川上地区連合町内会の了解を得た後の8月24日、舞岡台自治会役員と対策委員は約2,000名分の署名簿を添えて市長並びに市議会議長に陳情、計画の復活を強くお願いしました。その足で戸塚区並びに港南区選出の市議会議員に協力要請を行い、さらに市議会の全政党の議員控室に寄り協力を要請、すべての政党から協力の約束を得ました。

9月7日、公園問題を審議する市議会第7常任委員会が開かれ、公園計画復活の陳情は満場一致採択され、さっそく翌週、鈴木喜一市議会議長から舞岡台自治会長あてに「陳情の趣旨に沿って努力する」との回答書が届きました。

（6）公園計画、ついに復活！

10月25日、今度は細郷道一横浜市長から舞岡台自治会長あてに「来年度予算に調査費を計上し公園計画を再作成する」との回答書が届きました。

こうして公園計画はついに復活しました。場所は〇不動産(株)が明治学院大学に売却した土地(当初の公園予定地でした)の南側の山林で、ここを新たに買収し、総事業費75億円の公園計画が作成されました。

その後、横浜市ではこの計画に沿って翌昭和55年度より毎年予算を計上して進め、昭和58年度、待望の公園の造成に着工いたしました。

以上のように舞岡公園は昭和48年の構想発表から、10年後の昭和58年に着工、23年後の平成8年に全面開園しました。

公園計画が中止、そして復活となったことにより公園の面積が22ha（山下公園の3倍）→28.5ha（同公園の4倍）と広がり、さらに公園の名前が戸塚市民公園→舞岡公園と変わり、公園出入口が小田急分譲地側→舞岡台側になるなど、まさに「人間萬事塞翁が馬」の出来事でした。

以上、拙文は平成29年3月発刊舞岡台自治会創立50周年記念誌「50年のあゆみ」から要約転載したものです。



広大な舞岡自然公園



舞岡公園の古民家*

*古民家は、平成7年品濃町の金子邸が移築復元されたものです。同年、市認定歴史的建造物となりました。

(元戸塚市民公園促進対策委員会事務局長)

14. 川上村舞岡時代の思い出 寄稿文集「川上村舞岡」

南舞岡3丁目在住 神谷 三江子

私は、今の品濃町の奥で生まれ、舞岡で育ち、舞岡から離れた事があります。舞岡とその周りの移り変わりは、ずっとこの目で見てきました。

舞岡も昔からみると、ずいぶん変わりましたね。手元で読んだのは昭和47年に出された川上小学校80周年記念誌です。私も息子も、この小学校の世話になりました。

私達が通った川上小学校はもう廃校になりましたが、街道沿いの今の山崎製パン(株)の工場の向い側の齋藤医院(現在ことは保育園)のある辺りだったと思います。

舞岡中学校も、矢部町の今の戸塚共立第2病院の辺りにあった中学校の分校だったんですよ。

独立したのは昭和37から38年頃かしら。そうですね、舞岡が横浜市に移管になったのは、私が小学校の頃ですから、たしか昭和14年の4月頃だったと思いますね。それ迄は、神奈川県鎌倉郡川上村だったんですよ。川上村は、七つの部落から出来ていました。

上柏尾、下柏尾(今の柏尾町)、前山田(今の前田町)、後山田(今の川上町)、舞岡、品濃、平戸の7つです。町の字が付く様になったのは、それからあとのことです。地の者というのは、この川上村で生まれた人のことです。

市に移管になる前は、例えば罰金などは、毎日少しずつ、テクテクと鎌倉まで納めに行った様ですね。毎日行くのが罰なんだと私の父親などが話しているのを聞いたことがあります。

この辺の土地では、八幡様の前の川から右手(戸塚側)を「かみ」と言い、その反対側の山田車体(今の神奈中バス営業所辺り)までは、「しも」と言いました。

現在は金子政也さんのお宅の辺りが、^{あざはら}字原、私の家の辺りが^{あざまごたろう}字孫太郎と言いました。

畑の水はこの両方から汲んでいた様です。

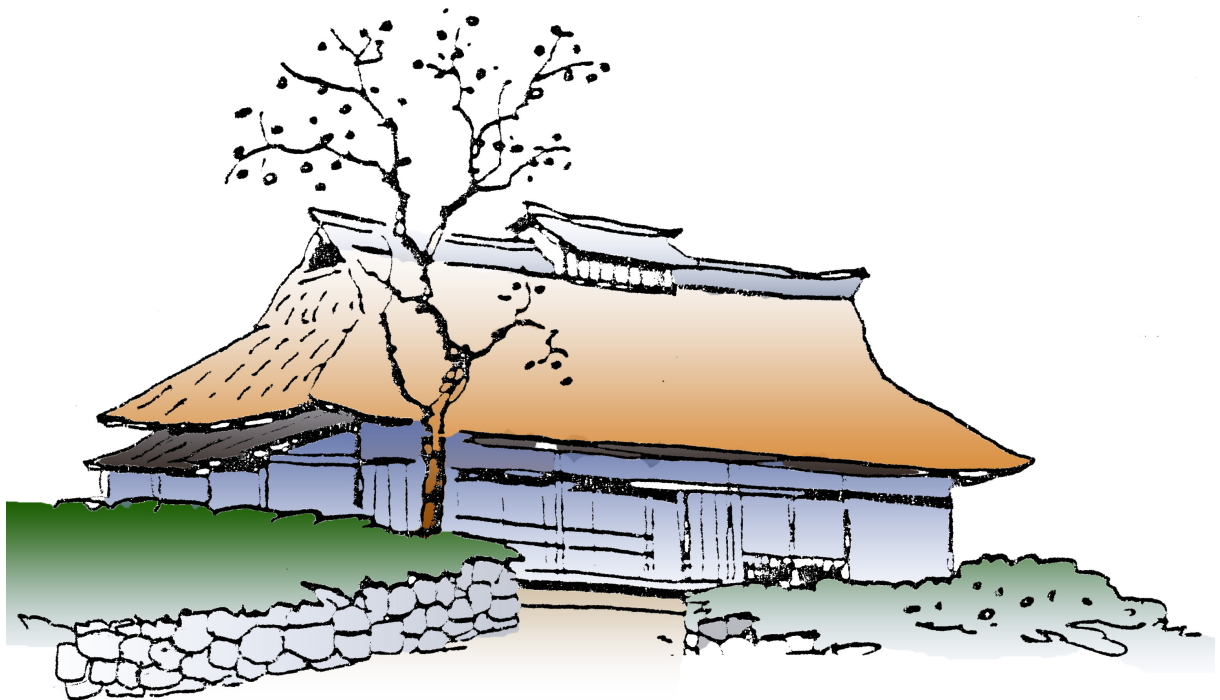
その当時、舞岡からこの辺の畑に通うのには馬を連れてきていた人もいまして、長福寺の前の坂を上がって来て、松尾工務店(現在の舞岡高校前)まで来ると馬が動かなくなったと言う話を聞いたことがあります。それ程、あの坂は、長く急な坂だったんですね。今では削られて低くなっていますが。

この団地の造成当時、私は舞岡町内会の衛生部で、毎年5月頃から10月頃にかけて、グループで保健の指導や薬の配給などで1軒1軒廻ったのですが、私は自転車だったのでこの一番奥の方を持たされたのですが、ブルトナーのほこりは、すごかったですね。毎日それを浴びて走り廻ったものです。

まだまだ思い出話は続きますが、これからも大事に語りつなげていきます。

(ニシキ理容室店主)

引用：舞岡台の10年のあゆみ



前田町物語の表紙挿絵に着色